

短歌教室『楷の木』

日常の出来事や風景を気軽に詠んでみませんか？

短歌教室「楷の木」のみなさん



短歌教室『楷の木』は、平成22年から東多久公民館で月1回、5人のみなさんで活動されています。代表である角本久子先生の指導を受けながら、各々が思いを込めて詠んだ短歌を持ち寄り、作品を披露したり、県の文学賞短歌部門をはじめとした作品展に出展しています。

角本さんは「身の回りの風景や出来事を、『五・七・五・七・七』という文字に合わせて、日記をつける感覚で気軽に綴ることから始めます。短歌は心にうかんだものを言葉にします。いつからでも始めることができます。言葉の奥深さや美しさを楽しみましょう」と話しました。

教室に入って2年目の中野亜貴子さんは「身近な出来事を歌に残すことで、相手に分かりやすく伝えることにつながっています。今は続けることを目標にしています」と短歌の楽しさを語りました。

活動は、東多久公民館で毎月第1木曜日の10時～12時まで行っています。日常の出来事や感動したことなど歌に込めてみませんか？

見学も大歓迎です。気軽にお越しください。

代表 角本 久子 ☎090-5489-9149



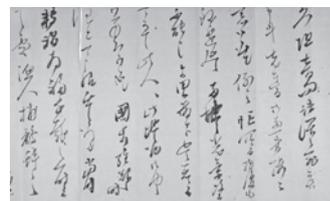
角本先生（写真右端）の指導を受けながら作品づくりに励むみなさん

ふ・わ・あ・い・ひ・ろ

●連載35● 郷土資料館で学ぶ多久の歴史 幕末・維新期 佐賀・多久の賢人③古賀穀堂

古賀穀堂（1777年～1836年 安永6年～天保7年）は、「寛政の三博士」として知られた古賀精里の長男で、幕末の佐賀藩主鍋島直正の教育係をつとめるなど藩主の側近として活躍しました。また草場珮川（後に佩川）の名づけ親でもあります。

当館所蔵の「草場家資料」には、穀堂から佩川宛ての書簡が50通ほど残されています。今回展示している文政9年（1826年）頃の書簡は、「学問のある侍臣は佐賀藩におらず、このままではいけないと思っています。だからあなたにもあれこれ考えてほしい」と当時の佐賀藩政を鋭く批判し、さらに「私とあなたの間だから話したのです。このことは秘密にするべきものなので、一読した後は火中に捨てるように」と釘をさしています。二人が強い信頼で結ばれた、ごく親しい間柄だったことがわかります。



古賀穀堂より
草場珮川宛書簡

多久市郷土資料館・歴史民俗資料館・先覚者資料館

開館時間 / 9時～16時 入館料 / 無料

休館日 / 月曜日（月曜が休日の場合は開館し翌火曜休館）

■問い合わせ 多久市郷土資料館 ☎75-3002

市民文芸

短歌

《春の芽短歌会 互選》

此の日頃 韓国ドラマにはまり込み

夫の帰宅も無視して見入る

福島那智子

さざんかの赤く散り敷く花びらを

掬いて唄う「さざんかの宿」

梶原恵美子

飼い主を失いし犬の哭く声が

凍れる夜の間に消えゆく

浦野嘉恵

早ばやと 雛を飾りてこの年も

老いに安けき春を希めり

川浪信子

個より公の 行く先は徴兵制となる

八十歳には見え透く未来

尾形節子

俳句

《俳句 楷樹句会 互選》

日向ばこ 遠い日の恋語る老

不二見恵美子

春寒し 老斑の手をしみじみと

森山 抱石

節分の 豆は美人の鬼に打つ

納富 芦風

急に降る 春の霰に 叩かるる

野田キヌ子

山茶花の 零れし土の 赤々と

田中久美子

川柳

《多久市川柳会 互選》

塩分が 敵のような 献立表

大谷 和

目力に 引かれて 鯛の 頭買う

大谷 和

瞬間の プレイが決める 世界一

西山 残月

次に会う 日があり 別れた 楽し

西山 残月

恋別れ 知っているのか 残り雪

井上 東子